

# ジンメル的女性論の研究(三)

石 塚 勝 雄

## 四の二

『<sup>(註1)</sup>ここでもって、女性・彼女たちの行為・彼女たちの信念・彼女たちの実践的なまたは理論的な生活内容などに對して、絶対的な尺度(實際は男性に妥当する規範が作り上げているものなのだが)が踏み込んで来ると、それと同時に一つの相対的な尺度(それは絶対的な尺度と同じ側に立つこともあり、反対の側に立つこともある)が座に着くのだが、これがまた絶対的尺度に劣らず男性の特権に由来しているものであり、絶対的尺度と全く正反対の要求を提出することもしばしばなのである。というのは、男は今度は言わば女に對する党派として、女性に對する對極的な關係において望ましいと思うことをも、女性に對して要求するからなのであり、その男の望むものとは因襲的な意味において女性的なものであり、女性自身を満足させ、女性自身のうちに中心点を置く女性の特色を意味するものではなく、男に向けて方向づけられたもの、すなわち、男に氣に入り、男に役立ち、男を補うべきものなのである。男性の特権というものが、この二重の尺度、すなわち、性を超えた客觀的なものとして出現してくる男性的な尺度と、これとは正に相対的であって、しばしば全く相反することもある特別に女に向けられた尺度、この二重の尺度を女性に課しているのであるから——女性はあるところいかなる立場からも無條件的な評價を受けることができないのである。』<sup>(註2)</sup>

この箇所を読む人は誰しも、ジンメルが女性に對して大變な同情を寄せ、女性の立場に立って両性問題を考察して

いることが分かるであろう。初めのところで『彼女たちの実践的なまたは理論的な生活内容』と言っているのは、比較的实践的色彩の濃い、または比較的理论的色彩の濃い生活内容の意で、この二つは程度的な差異にすぎないものと解される。

『絶対的な尺度』とは、男女を問わず人間一般に妥当する尺度の意であるが、すでに第二節で述べたように、それはジンメルによれば、実際は男性に妥当する尺度にすぎないのである。『相対的な尺度』とは、卑近に言えば、男の女に対する虫のよい註文のことで、日本流に言えば、「良妻賢母主義」とか「才色兼備の令嬢」などのことを指している。こうした二つの尺度が、批判を許さない絶対命令のように通用しているのは、男性支配の社会に由来するとして、ここにもジンメルの社会学者としての考察が見られる。

つぎに、この二つの尺度が正反對の要求を提出する場合というのは、つぎのようなことを言うのであろう。例えば、真面目・勤勉という道徳は人間一般的な尺度として女にももちろん適用されるが、真面目一点張りというのは、ぎこちない窮屈な感じを与えて男の気が休まらないので、女はほんやりとぬけているところがなければならぬ、というふうな註文を指すのであろう。つぎに『因襲的な意味において女性的なもの』とは、愛嬌・やさしさ・素直・従順の類を指すものと解される。

以上のように、ジンメルによれば、この二つの尺度は女を向自的な (für sich)<sup>(註三)</sup> 存在としてみる場合には、どちらも全く妥当しないものである。というのは、すでに述べたように、絶対的尺度というのは、その実体は男性に妥当する尺度であり、相対的尺度というのは男の側の身勝手な虫のよい註文にすぎないからである。女はこの二重の尺度をあてがわれて、がんにがらめに縛られ、浮かぶ瀬がないと言う。日本流の良妻賢母主義にしても才色兼備の令嬢にしても、よく考えて見れば、男の御都合主義にすぎず、女それ自身としていかに在るべきかの理想像は少しも問題にされていないことが分かるであろう。

『男がこの二つの要求の一方を女によって充たされながら、それを当然のこととして受け取り、一方この欲求の充足とは論理的には同時にはあり得ないもう一つの欲求の充足を求め、それが充たされないという意識に支配されていることは、しばしば問題になっているばかりでなく、むしろ問題が発展して、多かれ少なかれ悲劇となっているのである。』

言わば天賦の女性的素質を持った婦人たちだけが、全く分化された個性としてと同時に、その深層においてすべての特性の力を全く分離しないで保っている統一体としても、作用するということが存在するように思われるのだ。偉大な芸術作品が正にこの二元性において作用するのと類似してはいるが、この場合はこの二元性の概念的矛盾などは問題にされないものである。典型的な場合ともなれば、この二元性はそのような矛盾にもかかわらず充分に作用を及ぼすのである。すなわち男の要求する立場の変化によっても、いかなる場合でも、女性をば——それに對して男が要求を提出しても差支えないし、客観的な規範を持っている高所から価値判断をしても差支えないような人柄 (Wesen) —— そういう人柄としておくように思われるのである。』<sup>(註四)</sup>

以上のジンメルの哲学的表現の前段を卑近に言えば、男がサーヴィス満点の世話女房に満足しながら、一方その女房が人間としての教養の貧困のために、話し相手にならないことを嘆く悲劇を述べたものである。前項のジンメルの表現によれば、「相対的尺度」(女に對する虫のよい註文)を満足させながら、さらに「絶対的尺度」(男女を問わず人間一般に妥当する尺度)をもあてがって、それが充たされないことをかこつ悲劇である。

相反する二つの註文を同時に出して二つとも満足させようというのが、もともと無理な註文であるのに、ジンメルによれば男はその無理に気がつかないでいるために、悲劇となっているわけである。ギリシャの悲劇詩人ソフォクレスの言葉「女は見るべきものにして、聴くべきものにあらず」は、現代的に言えば「女は男の觀賞物であって、男の話し相手にはならないものである」の意であるし、オスカー・ワイルドの言葉「女は愛すべきもので、理解すべきも

のではない」も同じ流れの思想に立脚しているし、何れにしてもこのような女性観を持っておれば、こうした悲劇は初めから起り得ないわけである。しかもこの悲劇は一般的である。この悲劇を一般化している所以のものは、男女関係の理想像を力説する数々の思想が一般に普及しているからであると言えよう。しかし、例えばそのような思想の中から、カントの有名な言葉「男と女が一緒になって初めて人間になる」<sup>(註五)</sup>をとり上げて考えて見ても、異質なものが合体して、そこに本当の人間が出来る、という意味であるかも知れないし、なにも男の二つの註文を同時に満足させてくれる女が現実にいることを想定しているわけではあるまい。ところが、このような女がいることを空想的にも男は一般に想像し勝ちであるために、この悲劇が一般的になっているわけである。しかし、このような男の立場から見理想的女性が稀れにはいることを述べたのが次の段である。

この箇所の後段は難解である。結論を先に言えば、前段の男の二つの要求を同時に満足させるような・天賦の女性素質を持った婦人が稀少的には存在するらしい（ジンメル自身の表現そのものが断定的ではない）ことを述べたものである。なお、ジンメルは後述のところで詳論しているのであるが、男は分化した二元的または多元的存在であり、女は分化しない一元的な統一（*Einheit*）である、というのが彼の持論であり、このことがこの箇所を理解するために前提として必要である。「分化された個性として作用する」というのは、一例をあげれば、権力に屈しない剛毅な面が現われる場合などである。「統一として作用する」というのは、その剛毅な一面を持ちながら統一（人柄）としてはあくまで女性的やさしさに包まれている場合などを指す。偉大な芸術作品と類似しているというのは、その芸術作品が造型・色彩・素材等々の諸々の観点から見えて秀れているばかりでなく、渾然たる統一として秀れた芸術的気品をたたえている有様を指すものと解される。「二元性の概念的矛盾」というのは、前例で言えば、剛毅とやさしさが形式論理的には概念的に矛盾すると見たものである。

このようにして、ジンメルは、男が論理的には相容れない二つの無理な註文を出して、それが同時に充たされない

ことをかこつ悲劇が一般的である現象を指摘し、その根拠を明らかにしている。平易に言えば、女は男の話し相手にはならないものであるのに話し相手にしようとするから、そこに悲劇が生れるというのである。しかし例外的には、男の身勝手な虫のよい註文にも応じ得るし、人間としての高い価値判断にも応え得るような、天賦の女性的素質を恵まれた婦人の存在を認めている。両刀使いの名人のようにも聞えようが、これは「巧まざる二刀流」とも言うべきであって、特定の婦人の人柄から自然に流れ出るものでなければならぬ。ジンメル流の表現によれば、そうした婦人はあくまで向自的な (*für sich*) 存在でありながら、それが同時に男の前述の二つの要求を満足させるわけである。日本で言う「よくできた女」とは、この種の女を指しているようにも思われる。

なお、この箇所のジンメルの表現が断定的でないのは、認識主体である彼自身が男性であることからの当然の帰結と言えよう。しかし、このような婦人の姿の描写は、彼の対異性関係において、この種の婦人と実際に接触した体験から生まれたもののように思われる。(註六)

(註一) 『』に開かれた箇所が原文のままを拙訳した部分である。

(註二) G. Simmel, *Philosophische Kultur*, Leipzig, 1911, S. 70ff.

(註三) 向自的 (*für sich*) は哲学上の用語。ジンメルは女性の本質について、この語をこの後でもしばしば用いている。日本語の字義は「自己に向う」の意であるが、利己的という意味では全くない。

(註四) G. Simmel, *op. cit.* S. 71ff.

(註五) *Erst Mann und Weib machen den Menschen aus.*

(註六) ジンメルの対異性関係については本研究(一)神戸女学院大学論集 第十二巻 第一号 三頁参照。

『全体の現象循環の決定的な動機は、上述のように、両性の区別というものが、一見したところ論理的には等価値で対極的な二つの党派間の相対関係であるように見えるのだが、実のところ典型的には、男にとってよりも女にとってより、重要なものであること、すなわち、男にとって自分が男であることが本質的であるよりも、女にとって自分が女であることの方がより本質的である、ということなのである。性というものは言わば、男にとっては一つの行為 (Tun) であるが、女にとっては一つの存在 (Sein) なのである。しかしそれにもかかわらず、いや正にその故に、その両性の区別の意味するものが、正確に観察すると、女にとっては第二次的な事実にすぎないのである。女は一つの絶対的な本質的実在の中に安らうかのように、自分が女たることの中に安らう (ruht) ているのである。いく分逆説的に言うならば、男どもが存在しようがしまいが、それには無関心でいられるのだ。男にとっては、このような求心的で向自的な性は存在しないのである。』  
(註二)

以上のようなジンメル独特の繊細で精緻な論理と理論は、パラグラフを変えないでさらに続くのであるが、考察の便宜上ここで一旦区切ることにした。最初の『全体の現象循環』とは、両性現象を粗雑に男女間の相互関係と見るだけではなく、両性の一方から他の性に向ったものが反応を起して、はね返って来る循環現象 (der Erscheinungskreis) と見ているからの表現であって、ここにもジンメルの観察の精緻さがあると言えよう。以下ジンメルの論述は繊細をきわめるのであるが、平易に荒っぽく要約すれば、つぎのようになるであろう。ジンメルに限らず、女は「性的存在」とはよく言われる。(これはよく誤解されているように、女は男よりも性生活を好むという意味ではない) 性的存在であるが故に異性との結び付きは、女にとって本質的重要性を持っている。しかし女はそれ自体が一つの存在であるが故に、異性との結び付きがなくとも、言わば自分の殻の中に閉じこもって安定した生を営むことができる。し

かし男の性はこのように向自的 (für sich) なものではなく、男は常に自分の外側に向い、外側にあるもの (理念的なものをも含めて) を追い求めて、落ち着かない生活をしているのと比較すれば、よく理解できるであろう。

『性的な意味での男の男性要素が女との交渉に結ばれている場合の方が、女の女性要素が男との交渉に結ばれている場合よりは、はるかに通過的である。この事実をわれわれは承認するのだが、このことは恐らく、今現に問題になっている素朴な仮説「女性たることは男性に対する相對現象にすぎないのだから、この相對關係が脱落すれば、後に残るものは何も無い」の理解を妨げることになる。實際この場合中性的「人間」が残るのではなく、一人の女性が依然として残るのである。それ故、娘たちが子供を持ちたいという熱情的な憧れは意識しているが男に対する憧れの方は意識していない、というのは多くの場合たしかに自己欺瞞ではないのである。女性における性的なもの自立性が最も広範圍に現われるのは、もはや男との交渉をさらに必要とすることのない妊娠状態の経過においてであり、また、人間がおよそ妊娠を惹き起すものが性交であると認識するまでには、人類の原始時代において、明らかに非常に長い時が経っていたという事実がこれによって分かるのである。』(註二)

この箇所の初めの文章の『通過的』 (durchgehend) とは、別言すれば「一過的」、さらに平易に言えば「通りすがりの」の意であり、この事実をシンメルは男としての體驗から認めているわけである。この事實は、シンメルの言う素朴な仮説「女は男を離れては無である」 (筆者簡約) の理解を妨げるといよりは、むしろそれと矛盾する。この仮説は日本などでも根強く、例えば、種 (男) と畠 (女) の思想、「腹は借物」の思想なども同じ系譜に属するものと言えよう。こうした思想も男性支配の社会の反映で、シンメル流に社会学的に言えば、男性の社会的優位の産物にすぎないであろう。このようにして「女は男を離れては無である」とする思想は、シンメルによれば、男性優位の社会の皮相な観方にすぎず、女は男との交渉をはなれても、それ自体が自己完結な性的存在なのである。

つぎにシンメルは、女における性は向自的な・自己完結的なものであることから説明される事例を二つあげてい

る。一つは、そのことから当然に少女時代における子供を持ちたいという憧れの意識が生まれ、それには男に対する憧れの意識を伴うとはかぎらないのである。つまり前者の意識は形而上の本質からくるのであり、子供を持つためには男との性的交渉を必要とするなどという自然科学的知識は必ずしも伴うとはかぎらないわけである。したがって少女時代の人形遊びなども形而上の本質を有するものであり、将来の育児の心構えなどを親や周囲が仕込もうとしたものではないと言えよう。

つぎは、妊娠の原因が性交であるという因果関係の認識が生ずるまでには、人類の原始時代において大変長い期間を必要としたことである。この事実はいくくの学者によって承認されているようであるが、<sup>(註三)</sup>ジンメルによれば、女の性が自立的であることは妊娠前も妊娠後も本質的には同一であって、そこには程度の差があるにすぎないから、その前後を劃する何等かの事件（性交）がなければならぬなどとは到底考えられなかったというわけである。

『女が人間としての存在と女性としての存在との最も深い合致の中に生を営んでいること、別言すれば、自己の性格上の本質にとっては最早異性との交渉を必要としないような・自己の内部で決定づけられている性的なものの絶対性の中に生を営んでいること、このことは女にとっては、今度は別の層から見ての話だが、この独特の歴史的現象においても、言わば女の形而上的實在の社会学的地点である異性との交渉を特に重要なものに行っているのである。ところが男にとっては、男に特有の性が他の性との関係に則してのみ現実化されるものであるから、正にこの故に、この関係は他の生活の諸要素と並んだ単なる一要素にすぎないのであり、女におけるような不滅の特質ではない。それ故に女との交渉は、男にとって自己の性が性となるための決定的な意味を持っているにもかかわらず、それでも全体としては女におけるような死活的な（viale）重要性を持たないのである。このことの典型的な態様はつぎの通り明らかである。すなわち、性的欲望の充足は、男を女との関係から解放し、女を男との関係へと結びつける志向を持っているということである。非常によく見うけられることだが、女は男に身を捧げるとますます



男を愛するようになる、いや、女の根深い本當の愛は、しばしば身を捧げることによって初めて成立し——しばしばその愛は妊娠状態を保護してくれる頼りどころを要求すること、それによって支えられていくのである。

しかしこれと同様によく見うけられるのだが、男の方は女が身を捧げてしまうと直ぐにもうその女には関心を寄せなくなり——そのために倫理的に最も唾棄すべき現象の一つに立ちいたるということである。(中略) 男にとってはセックス

性の問題は相對關係の問題であり、したがってその相對關係に何の興味もなくなると、一般に性の問題は消え去ってしまうという一般的な形式は、この際もそのままなのである。男の絶対性は彼が男性であることは結びついていないのだ。女にとっては、彼女が女性であるということが本質的な問題であり、それが彼女から生じている相對關係の中にも、その絶対性を第二次的に運び込んでいるのである。』(註四)

以上に展開されているジンメル論の論理はさきわめて精緻であり、そのまま味読すべき文章であつて、それについて筆者などがかれこれ説明したり、要約したりすべきではないと考える次第ではあるが、他の学者の思想・学説との関連において、少しく考察を加えてみたい。

すでに述べたように、この女性論はジンメルの学識生涯の第三期晩年の形而上学的傾向の濃厚であつた時期の作であるが、それが『女の形而上学的實在の社会学的地点である異性ととの交渉を特に重要なものにしてゐる』という表現にも現われているわけである。これと同じことが、徹頭徹尾形而上学者であつたショーペンハウエルによれば、「すべての形而上学的實在は最大の貪欲と焦燥とをもつて現象界に姿を表わそうと努力する」というふうな表現をとつてゐることと対照すると興味深いものがある。

この箇所の終りの方のことを簡潔に要約すれば、「男は本性上一夫多妻的であり、女は本性上一夫一婦的である」ということになる。これは小説家がよく取り上げる題材であるばかりでなく、学者・思想家によつても承認されている事実であるが、ただこの結論にいたる論理過程がジンメルにおいては前述のようにきわめて精緻であるに反し、シ

ゴッペンハウエルにおいては、自然科学をも導入してきわめて簡潔であることに注意したい。(註六)

(註一) G. Simmel, op. cit., S. 72.

(註二) ibid. S. 72ff.

(註三) 例えば、社会学者ウォードが、性交と妊娠との因果関係の発見の時期・模様・社会組織への大影響などに述べていること  
を L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, pp. 341—5, に詳し。

(註四) G. Simmel, op. cit., S. 73ff.

(註五) 拙稿『ショッペンハウエル「恋愛の形而上学」の研究(中)』神戸女学院大学論集 第七巻 第一号 一八頁。

(註六) 拙稿「前掲論文」前掲号、二七—九頁。

## 六

『性欲ないし性愛(Erotik)を宇宙的な原理として表現している絶対的なものが、男にとっては、女との単なる  
相対関係となり、一方、こういった領域を両性間の交渉として持っている相対的なものが、女にとっては、彼女の  
本質の絶対的なもの・向自的なものとなっているのである。このような運命の最後の結末として、一面次のよう  
な感情が確立されることもしばしばである。すなわち、女が完全に身を委ねたときさえ、その魂のうちには最後  
の留保が解かれないうままでいるような感情である——なぜなら女は男との交渉において女性であるだけではなく、  
正にそれ自身において女性であるからである。女の中には一つの秘密な、自分だけに属するもの・自分のうちに閉  
されたものが存在しているようなのである。それを女はなるべく交換に出しはするのだが、(というのも女は正に完  
全にわが身を委ねているのだから)、しかしその際でもそれは相手に向かって開かれることはなく、たとい相手の所

有物となってしまっても、それでもやはり自分の根柢の上に止まり、自分の殻の中にとじこもうとするのである。実際には全く簡単な行為でも、ここでは概念的表現をとるので、むずかしくなり、とかく難解なものになってしまうのである。男は自分の生 (Leben) と行為 (Leisten) とを普遍妥当性の形式の中に入れ、かくして両性の対立という事実を超越させるために、性というものが男にとっては、実際女たちとの関係という相對關係の中にのみ存するのである。しかし自分が女性であるという事実の中にその最後の根を下ろし、ないしはその事実と合一 (identisch) している女たちにとっては、性というものが一つの絶対的なもの、一つの向自的存在 (Für-sich-Seiende) となっているのであり、それが男との交渉において、一つの表面化と經驗的現實化とを獲得するのみなのである。<sup>(註1)</sup>

この箇所で述べられていることは、まず第一に、よく言われている「女心の閉鎖性」ということである。その根柢としては、前節で述べた一つの主題が表現を変え、変曲されて再掲されているのである。この手法は今後も再三、再四用いられているので、これについてここで一言しておきたい。この手法が用いられる第一の理由は、種々の事柄が同一の根柢から導き出される場合、その度毎にその根柢を掲げて論理的体系をとのえる必要からくるものと言えよう。つぎに、その同一の根柢が、これから述べようとする事柄にびったりと適應するように、その度毎に表現が変えられているのである。これは主題が変曲されて繰り返される音楽の手法に通ずるものようである。ジンメルが音楽の素養があったことは最初に彼の生涯を概観したところで述べたが、<sup>(註2)</sup> 同じく音楽に対する造詣の深かったシューベンのハウエルが好んで用いた手法でもあった。この意味からしても、総じて大家の文章は生の形で味読すべきもので、これについて説明したり要約したり論評を加えたりすることはぶちこわしになるのであるが、芸術家でない婦人問題の学徒が的確に「女性」を把握するためには、こうした方法も止むを得ないのである。

さて、「女心の閉鎖性」もさることながら、一方「女は夫に対して身も心も捧げる」などという表現もよく用いら

れているが、ジンメルによれば、女は身を委ねても心は捧げないものだということになる。さらに日本などでは「夫婦は一心同体」などもよく言われるのだが、これは夫婦関係を理想化または空想化した言葉にすぎず、ジンメルによれば現実にはあり得ないことになるわけである。またジンメルのこの所説は結局ヴァレリ (Valéry) の次の言葉とも一致する、「神は人間を創造したが、人間が孤独であるのを見て、その孤独をいっそうよく感じさせるために彼の伴侶を与え給う。」

つぎに述べられていることは、男女間の性的交渉そのものは、男の側から見た場合と女の側から見た場合とでは、本質的な相違があるということである。すなわち、男は普遍妥当的な人生の目的などというものを打ち立てて、その観点から自分の生と行為とを律しているために、性問題は女との相對關係にすぎなくなっているのである。これに反し、女における性は、すでに再三述べられてきたように、一つの絶対的な・向自的な形而上の本質をもつものであり、男女間の性的交渉は、その形而上の実在が現象形態をとる場面なのである。何れにしても、女がその形而上の実在すなわち向自的・絶対的なものを運び込んでいる性的交渉の場は、相對の世界にすぎないために、その絶対的なものは扉が開かれないままである、というのが「女心の閉鎖性」の形而上学なのである。

『しかし、この男との交渉は正に女性の基本的存在の現象形態なのであるから、その内面には、女にとって絶対に並ぶものなき重要性を持っているのであり、それ故に、より深い意味から考えれば全く誤っているつぎのような判断が生じてくる。——すなわち、女性の決定的な本質は女性それ自体のうちに宿るものではなく、この男との交渉と一致するものであり、それ以外の何物でもない、という判断である。女は男一般なるものをそれほど必要としてはいないのである。何故かといえば、女は言わば自分自身のうちにすでに性的生活を持っているのであり、この性的生活は彼女の本質の自己完結的な絶対者なのである。しかしその故にますます女は、この本質が現象形態をとる必要から、個体としての男を必要とするのである。男は女よりもはるかに容易に性的に興奮しやすいが、それと

いうのも、その際男にとっては自己の本質の総体の動揺が問題ではなく、一つの部分的な機能の動揺だけが問題であるからであり、そのためには男はごくありふれた刺戟だけで十分なのである。以上のことから、女は個別の男に余計に愛着し、男は女一般に余計に愛着する、ということが理解できるわけである。』<sup>(註三)</sup>

すぐ前の箇所で述べたように、ジンメルは男との性的交渉は女の形而上の実体(基本的存在)が現象形態をとったものであるとし、そのことから男との性的交渉は女にとって絶対的重要性を持つものだと結論している。その観点から皮相ともいうべき『全く誤っている判断』を否定する。この『全く誤っている判断』というのは、前節で『素朴な仮説』と言ったものを、次の結論を導き出すのにふさわしいように今度は表現を変えて述べたものにすぎない。その結論というのは、女における性は向自的な・自己完結的な絶対者であるから、女は男一般をそれほど必要とはしないが、この本質的絶対者が現象形態をとる必要から、女はますます個体としての男を必要とするというのである。したがって、女は本質的動揺いわば全人格的動揺がなければ性的に興奮しない。ところが男は女よりもはるかに性的に興奮しやすいのは、部分的機能だけの動揺で充分だからである。最後の結論である『女は個別の男に愛着し、男は女一般に愛着する』というのは、前節で筆者が要約した「女は一夫一婦的・男は一夫多妻的」が表現を変えて述べられてゐるにすぎない。

(註一) G. Simmel, op. cit., S.74ff.

(註二) ジンメルの音楽的素養については本研究(一)神戸女学院大学論集 第十二巻 第一号 一頁参照。

(註三) G. Simmel, op. cit., S. 75.

## A Study of G. Simmel's View of Womanhood (2)

### Résumé

The absolute criterion which is, according to its pretension, universally human, but is, according to Simmel, actually masculine, and the relative criterion which is required for the female by the selfish desire of male—these two criterions are imposed to the female. In this state, she can really not obtain an unconditional appreciation. Only a few ladies who are highly endowed with the womanly nature will suffice these two criterions.

For the male, the sex means an action, for the female, it means a being. Because the female is a being, she is able to to be indifferent to the male in general. But the being is sexual, the sexual relation with the specified male, which is the presentive phenomenon of the metaphysical, female nature, becomes peculiarly important for the female.

The woman's mind is, as it is said, closed even at the place of the sexual relation with the specified man. The reason is, according to Simmel, as follows—the place above mentioned is only the world of relativity, but the woman's mind, which belongs to the metaphysical world of absoluteness, cannot be opened.